『国語科教育』

古典に親しむ態度を育み、「考えを形成する力」を向上させる指導の在り方

～古人の思いに触れ、自分の生き方を見つめる実践を通して～

関市立緑ヶ丘中学校　教諭　辻 宏紀

―概要―
生徒は現代文と違って古文に苦手意識を感じている。また、古文自体の学習に興味を感じていない。そこで、古文を単なる昔のものとして扱うのではなく、現代とのつながりを意識させることができれば、必要な学習と感じるであろう。さらに、「平家物語」では、作品世界に浸れるように必要に応じて補助資料を配付することで生徒に古文への学習に意欲をもたせることをねらった。古人の思いに触れ、自分の「考えを形成する」学習として行った「枕草子」、「平家物語」の実践を述べたい。学習指導要領には、今後予測不能な時代に陥り、どのように未来を切り開いていくのかが課題とある。その課題を打破する鍵が自分の考えを根拠を明確にし、相手に適切に伝えるという「考えを形成する力」の向上と考える。思い付きをただ書くのではなく、考えを支える根拠となる情報や書くための視点を具体的に提示する必要がある。特に「平家物語」では、義経の生き様をつかむことが現代社会にもつながることを本研究でねらって実践を行った。

1. 主題設定の理由

(1)はじめに

今年度、緑ヶ丘中学校に赴任した4月下旬に関市教育研究会にて秋に授業公開することが決定した。また、今年度の授業公開は来年度、開催予定の岐阜県中学校国語部会の研究発表会である美濃地区大会を意識したものとなる。関市では、「読むこと」、「言語文化」の二つの部会を受け持ち、本校は「言語文化部会」に所属する。今年度から県の「言語文化部会」の研究の題材が【古典】になったことを受け、2年生の古典教材で生徒の興味関心を引き出し、思考力や表現力の向上を目指すこととした。

(2)学習指導要領から

「教科書を学ぶ」ではなく「教科書で学ぶ」という言葉は昔からよく聞く。授業の定着度を確認するための期末試験と違い、国語科の実力テストや高校入試で教科書教材が出題されることはあるまい。指導要領の指導事項をいかに教材で具現化するのか、国語科教師の実力が求められる。今回、古典教材で研究を進めるにあたり、意識すべき点は「伝統的な言語文化 2 年生」の**【(イ)現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ること。】**である。生徒にとってはあまり学習意欲のわかない古典で単に作品に親しむだけでなく、思考力や表現力を向上させる手立てを考える必要性を感じた。また、今回の改定では、第一章「総説」で「厳しい挑戦の時代」、「予測が困難な時代」、「人工知能(AI)の飛躍的な進化」というネガティブな言葉が並んでいる。**困難で厳しい状況を乗り越えるには自分の考えを明確にし、他者に正確に伝えることが重要となる。**そのためにも学習指導要領の**【考えの形成】**というキーワードを意識し、授業において何をどのように表現させるべきかという書くための視点を明確にした。さらに、学習指導要領には国語科における育成するべき資質・能力について三つの目標が挙げられている。その中で特に本研究では二つ目の目標を重点とした。

・社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。

古典という分野は生徒にとっては、はるか昔のことと思われるが、古人の思いに触れたり、現代と比較させたりすることで、自分の考えを形成し、仲間との交流を行うことで自分の考えが深まり、現代の社会や日常生活にも生かせられる指導展開を念頭に置いた研究を行った。

(3)生徒の実態から

2年生の古典教材の導入として1学期に「枕草子」が位置付いている。そこで、学習前に生徒の実態を把握するためにアンケートを実施した。

古文の学習が苦手	74．2%
現代仮名遣いに直すのが苦手	74．2%
現代語訳することが苦手	74．2%
古文の音読が苦手	64．6%

以前と違い、小学校段階でも古文に触れる機会は増えている。また、1年生時に「竹取物語」(蓬莱の玉の枝)の学習で歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す、古語に注目しながら現代語訳をする、様々な音読の仕方を行うなど丁寧な古文の学習を経験しているが、アンケートの結果は芳しくなかった。

また、1学期最初の物語教材「アイスプラネット」では、濃い内容を求めるために全体を通してではなく、場面ごとに人物の心情や感じたことを初発の感想として書かせた。しかし、内容的には非常に表面的でただ書いただけというものが多く、**文章表現力に課題がある**ことがわかった。そこで、文章で表現する際には、**書くための視点【具体的に何をどのように書くのか】**を与える必要があると感じた。古文への興味関心が薄く、表現力に課題のある生徒の実態を打破するとともに、『**古人の思いに触れ、そこから感じたことや現代との共通点や相違点に着目し、思考・表現することが現代の社会・日常生活にもつながること**』を意識させるために研究主題を以下のように設定した。

> ***古典に親しむ態度を育み、「考えを形成する力」を向上させる指導の在り方***
> **～古人の思いに触れ、**
> **自分の生き方を見つめる実践を通して～**

2. 研究仮説

> **古典に興味をもたせるための補助資料を活用し、人物の行動や心情に着目して古人の生き方をつかみ、現代と比較し、自分の考えを適切に表現させる言語活動を設定すれば、古典に親しみ、表現力の向上を図ることができる。**

3. 研究内容

> **(1)指導計画の工夫**
> ①指導と評価の一体化を図る単元構想の構築
> **(2)指導援助の工夫**
> ①生徒の興味・関心を引き付ける資料・発問の工夫
> ②人物の心情を意識した音読活動の工夫
> ③交流を通して自分の考えを明確にする活動
> **④人物の生き方に着目し、現代との比較の中で自分の考えを形成する力を向上させる手立て**

4. 研究実践1 「枕草子」から

(1)「考えの形成」【(2)④】につながる指導について

2年生、1学期に古文教材の導入として**「枕草子」**が位置付いている。

「春はあけぼの。～」で始まる第1段は小学校時代から馴染みがあり、生徒は四季折々の素晴らしいと感じる時間帯の情景を現代と比較しながら**清少納言の感性に触れる**ことができた。生徒それぞれが季節に応じて感じたことを交流すると次のようなことが挙げられた。

春	春に見たとは言えないが、**確かに朝起きて外を見ると日の出の影響で空の色が日中と違うことはある。季節独特の雲と色合いがマッチしている**と感じたのだろう。 ……
夏	若草プラザ近くなど市内にもホタルのスポットがあるが、なかなか見る機会がない。確かにほのかに光ったり、乱舞したりする情景はきれいだと思う。**夏だから月夜が素晴らしいとか雨の日も良いという感覚は違う気がする。** ……
秋	秋は夕焼け空が素晴らしいというのは現代も共通だが、**カラスとの関連は斬新というか、なかなか見ることがない。** ……
冬	最近は雪が積もることも少ないが、確かに一面の銀世界はきれいだと思う。ただ、**霜の白さがきれいという発想はない。**宮中の早朝の光景は想像するしかないが、**現代と違って暖をとるのは大変だろう。**雪や霜の白は良いが、燃え尽きた炭火の灰の白はだめという**色という共通項で良し悪しを表現するのはすごいと思う。** ……

今回の研究主題のサブテーマ、「**古人の思いに触れ、自分の生き方を見つめる**」ことを意識し、平安時代に生きた「清少納言」の感性を現代と比較し、自分の考えをまとめた後、小集団で共感できる点や現代の感覚と違う点を交流した。

古文に親しむことも重要だが、「読むこと領域」との関連の中で生徒の課題である文章表現力の向上を意図した学習活動を仕組んだ。この活動が**「考えを形成する力」**を向上することにつながると考えた。

具体的に行ったのは次のような活動である。

教材学習後、**【自分流「枕草子」を書こう】**という季節感を表す文章を四百字程度で書くという学習が教科書に位置付いている。ただ、清少納言の感性や文章を参考に『現代版枕草子』を書かせても何を書けばよいか困る生徒も予想された。そこで、**書くための視点**を具体的に提示した。

> ・**季節は夏とし**、臨場感のある情景を文章化する。
> ・「をかし」、「あはれ」、「つきづきし」「わろし」の内容を入れる。
> （関連した内容とする。）
> ・**昔のものの見方や感じ方と現代の見方や感じ方の共通点や相違点を清少納言に伝えるという【手紙形式】で書く。**

このようにあれもこれも全ての季節で書くのではなく、内容を濃くするためにいろいろな情景が浮かぶ**夏に絞った。**また、**【清少納言への手紙】**という形式にすることで、**相手意識を明確にした文章になる**と考えた。生徒の文章を一部、紹介したい。

> 清少納言さんが言っていた「夏は夜。」すごく共感しました。私も夏は夜がいいと思います。**でも、清少納言さんとは違い、私は夏の夜にある花火大会や夏祭りがいいと**思います。暗いところに咲く花火、暗いほどより大きく美しく、すごく迫力があります。終わった後の静けさもまたいいと感じます。**「夏は夜。闇を照らす花火を見上げるのもをかし。また、その後の静けさもあはれなり。」** 古文で書くとこんな感じでしょうか。

…… **清少納言さんが言っていた「雨など降るもをかし」ですが、私はジメジメするので苦手です。**雨で祭りが中止になるのはめちゃめちゃ悲しいですよ。でも、1日ぐらい雨が降ってもいいかもしれませんね。**家で過ごす夏もすてきです。**風鈴の音が心を涼しく、穏やかにしてくれたり、スイカやそうめんを食べたり、外に行かなくても楽しいことはいっぱいあります。**「風鈴の音が響くのもあはれ。またさらでもそうめんを茹でて食卓に運んでくるもいとつきづきし。」**どうでしょうか。

そういえば最近、そうめんといえば、めんつゆで食べるイメージがあると思いますが、カレーのようなつけだれ、担々麺風、トマトを使ったイタリアン風など ……

単に『現代版枕草子』ではなく、【清少納言への手紙】という相手意識と書く視点を提示したことで、古人のものの見方と現代のものの見方とを比べ、情景や心情を具体的に書く生徒の姿が多く見られた。

5. 研究実践 2【平家物語】において

(1)指導計画の工夫

①指導と評価の一体化を図る単元構想の構築

2学期に学習する「平家物語」が2年生の古文の中心教材と考える。「温故知新」ではないが、今まで行ってきた授業展開を見直し、生徒が苦手な古文に興味をもち、国語で付けたい力が身に付くような指導構想を考えた。その際、6 月に参加した県総合教育センターで学んだ【10 の項目】を基に段階的に単元構想を構築した。以下に示したい。

【資料１・単元構想図】

(2)指導援助の工夫

①生徒の興味・関心を引き付ける資料・発問の工夫

「平家物語（扇の的）」は過去何十回と授業を行ってきたが、自分自身、源氏と平家の対立のきっかけから壇ノ浦の合戦、義経の自決につながる過程を詳しく知らない。社会科教諭に尋ねたところ、源平合戦は授業でも詳しく扱わないということであった。そこで、「鎌倉殿の 13 人」の書籍や図書館の学習漫画を参考に年表形式でどのような出来事があったのかを「ハンドブック」にして配付した。生徒は興味をもったことをマーカでチェックし、「扇の的」前後の背景を理解し、学習に臨むことができた。また、夏休みに「扇の的・弓流し」の舞台である「屋島」を訪れ、そこで撮影した【写真 1】「現在の屋島、扇の的」や現地の方から伺ったことを発問の形で生徒に投げかけると仲間と真剣に考える姿が見られた。

『教科書にあるように勢力を盛り返した平家軍を「屋島」に退かせた義経の奇襲で有名な「一の谷の戦い」が 1184 年２月で「扇の的」や「弓流し」の舞台である「屋島の戦い」は翌年、1185 年２月と、１年後なのはなぜだろう？』

と発問した。自分自身、今までこの１年の時間差について意識したことがなかった。何年か前に屋島で国語学者の金田一先生の講演があり、源氏が勢いに乗じて平家を攻めきれなかったのは船がないということもあるが、下級武士は春からの農地の耕作で戦いに参加するモチベーションが低いことも要因ということで、当時の武士は必ずしも戦いに全てを懸けられない状況もあることを知り、驚く生徒も多かった。

【 写真１ 】

本教材の重点となる指導事項の一つは**「読むこと領域」（イ）**である。

「目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を理解すること。」【精査・解釈】

この指導事項を具現するためには教科書だけの情報では作品理解や人物の生き様をつかむのに弱いと感じ、別途国語による言語資料を補助資料として配付した。その**内容と目的**を述べたい。

①平家物語の根底に流れる「無常観」をつかむ
「祇園精舎の鐘の声」で始まる冒頭部分は有名で生徒にも馴染みがある。**「無常」**という言葉はあるが、人生は浮き沈みが激しいことをつかませるために後に続く、**中国や日本の人物が滅びるきっかけとなる文章を配付**した。
②与一に白羽の矢が立った理由をつかむ
以前の教科書にはあったが、義経が扇の的を射られる者を尋ね、与一を推されたときに**証拠を訊く場面を配付**した。**「飛んでいる鳥を射落とすのを競っても三羽のうち二羽は射落とす者」**という前後の古文・現代語訳である。
③一度、辞退した与一が命を受けた背景をつかむ
「**辞しがたく**」という表現があるが、単に大将の命に逆らえないのであれば、**【最初に辞退したのはなぜか。】「扇を射る自信がない。失敗したら平家が勢いづく」**などが状況から読み取れる。**「源氏の代表で責任重大」という状況は変わらない**のに与一の心情の変化は教科書からは分からない。そこで、**「義経が与一に放った言葉」**の前後の古文・現代語訳を配付した。**『判官はたいそう怒って、「鎌倉を発って西国へ赴いた連中は、義経の命に背いてはならぬ。少しでも文句を言う者はさっさとここから帰られるべきだ」と言われた。』**この義経の言葉を提示することで生徒は、義経の大将らしさとその命を与一が逆らえず、命を受けた背景を理解することができた。
④「扇の的」とは違う義経像をつかむ
導入で義経の戦いぶりを示す動画やワーク、教科書（「扇の的」）から感じる義経像は**「奇襲を得意とし、平家を倒すためには手段を択ばない。」「非情で怖い。」「平家の老武者を射倒させるなど、人の心がわからない。」「負けず嫌い。」「短気、強引。」「敵なら平気で殺せる。」「大将としては頼もしい。」**などが、生徒が「扇の的」で読み取った主な義経の人物像である。**【弓流し】**の学習で**『新たな義経の人物像』**をつかませた。そこで、活用したのが屋島に赴いた際に撮影した**【写真2】「源平合戦図屏風（弓流し）」**である。この写真で気付かせたかったのは、義経は**戦いの後方の安全な場所で非情な命を出すのではなく、自らも戦いの最前線に赴く**という「弓流し」の場面で読み取れる新たな人物像をつかませた。

【写真２】
「源平合戦図屏風」
※先頭で戦い、落とした弓を命懸けに拾う義経

②人物の心情を意識した音読活動の工夫

生徒が古文学習へ苦手意識を感じる一つに古文の読みにくさがある。しかし、古文をすらすら読むことができると達成感を感じるとともに現代語訳や内容理解にもつながる。「平家物語」は「枕草子」と違い、合戦の状況を表現するために擬音語や擬態語など読みにくい表現が多い。そこで、**『臨場感のある音読で現代の琵琶法師になろう。』**という課題を提示し、ペアやグループで音読練習を継続的に行った。単に古文をすらすら読むことだけを目指すのではなく、**「与一」の心情を読み取り、音読に生かす活動**を行った。具体的には次の通りである。

課題:『扇の的に向かう与一の心情を読み取り、心情に応じて音楽記号を使って臨場感を出そう』

とし、ワークシートに**『南無八幡大菩薩、我が国の神明、……扇も射よげにぞなつたりける。』**の部分の古文から読み取れる与一の心情を捉え、その心情に応じて**音楽記号「pp.p. mp.mf,f.ff.クレッシェンド. デクレッシェンド. ブレス」や速さ・テンポなどを付け、与一の不安な心情や強い覚悟を音読で表現させた**。個人練習後、グループでお互いの音読を交流させた。机間指導をしてもそれぞれの音読の工夫が評価できないので、**【ロイロノート】を活用**し、家庭で落ち着いた静かな環境で音読を録音し、提出箱に送らせ、評価を行った。また、強弱や臨場感が感じられる音読を選び、後日仲間の音読を共有させた。

強弱記号を意識して与一の気持ちになって音読することができました。与一の絶対成功させたいという思いを感じながら音読すると自然と強く読めたところもありました。私も与一のように何かがあるときは神様にお願いをしに行くので与一みたいに丁寧にお願いしたいです。
見慣れない漢字があって、まだスムーズに読むことができなかったので、強弱を意識していきたい。**与一の言葉に私は決意や覚悟を感じたので、その点を意識したい。**また、昔の文で分からないところもあるので、現代語訳と見比べて理解していきたい。**この授業で源平合戦に興味をもったので調べてみたいと思いました。**

毎時間書かせている授業の振り返りから生徒は「与一」の心情の揺れ動きを意識した音読活動を行えたことが成果と考える。

「枕草子」学習前の音読が苦手な生徒	64. 6%
「枕草子」学習後の音読が苦手な生徒	38. 7%
「平家物語」学習後の音読が苦手な生徒	29. 6%

「枕草子」学習前は7割近くの生徒が音読を苦手と答えていたが、ペアやグループで音読し、「平家物語」では合戦の臨場感を伝える**『現代の琵琶法師』**を目指すことで音読の苦手意識が改善したと考える。

③交流を通して自分の考えを明確にする活動

自分の考えを形成し、深めるには情報を整理し、思考することによって根拠を明確にすることが必要である。また、多様な考えに触れるための交流の場を位置付けることも必要である。その際、交流グループを生活班や友達同士でなく、生徒の実態に応じて交流グループを指定した。本教材では対立する考えが生まれる2つの場で自分の考えを形成し、積極的な交流をすることで自分の考えを広げたり、深めたりすることを意図した活動を行った。1 つ目は『与一の腕前に対して賞賛の舞を舞う平家の老武者を射倒したことに対する源氏の反応、「あ、射たり。」と「情けなし。」のどちらに共感するか、根拠を明確にして自分の考えをまとめ、仲間と交流する』ことで、自分の考えを形成させる活動を行った。

【交流の方途】は次の通りである。

①立場を明確にし、自分の考えをまとめる。
②立場に分けた黒板にネームプレートを貼る。
③教師が意図的に交流グループを決める。
※男女や読み取りの深浅を意識したグループ分け
④指定されたグループ内で考えを交流する。
⑤スクランブル交流を行う。
⑥全体発表し、振り返りを行う。

ただ、感情(感覚)的に立場を選んでも根拠が明確とは言えない。そこで、次のような点を書くための視点(情報)として考えるように指導した。

・「扇」を射るきっかけはどうだったか。
・与一の心情の揺れ動きはどうだったか。
・当時の戦のルールはどうだったか。
・義経の大将としての人物像はどうだったか。
・源氏武者としてどうすべきだったか。

このような点を意識して自分の考えをまとめるように指導した。ある生徒の考えと振り返りを紹介する。

始めに平家が士気を上げるために挑発したかもしれないけど、挑発した平家もさすがに無理だろうと思った。扇に挑み扇を射た与一におもしろいと言ったらいけないのに我慢できないくらいすごいなと思い、舞を舞ってすごさを表現していて、与一をほめているのに殺すのはかわいそうだと思った。だから、殺すのは少しやりすぎているんじゃないかと思った。また、時代の関係もあって殺したのかもしれないから、少し仕方がないかなと思った。

上記の視点を整理してまとめられていると感じる。

与一の腕前のすごさに舞を舞い、平家として思ってはだめでおもしろいと感じるほど、与一のことをほめているのに殺してしまった。そこまでしなくてもいいと思ったし、やりすぎだなと思った。この義経の行動から心がなく、少しひどくて怖いなと思った。与一は命令にためらわず、従ったことから戦いに対して本気なんだと思った。

「あ、射たり。」、「情けなし。」いずれの立場で考えを形成した生徒も義経の戦いへの臨み方や非情さ、人間としての心のなさを共有し、次の『弓流し』の学習に臨んだ。また、単元終末の学習のために登場の頻度に関わらず、常に義経の人物像に着目させた。

【『弓流し』(2つめの対立・義経の行為の是非)から】

ねらい:流された弓を命懸けで拾った義経の行為を「肯定・否定」の立場で考え、交流する活動を通して、義経の源氏の総大将としての生き様に気付き、「義経」に対する新たな人物像をまとめることができる。

①「扇の的」での義経像を振り返る。

※冷たく、非情。勝つことしか頭にない。戦闘狂。 ……

②『なぜ、義経は命懸けで弓を拾ったのだろうか？』

※弱々しい弓を拾われ、源氏の恥になることが許せない。

課題:落とした弓を命懸けで拾った義経の行為をどう思うか？
「肯定・否定」の立場で自分の考えを明らかにしよう。

③「扇の的」と同様の方途で交流を行った。

【写真３・４】
・ネームプレートで立場を明らかにしたグループ交流

④『なぜ、義経が弓を落とすことになったのか？』

※与一が平家の老武者を射倒したことに怒って攻めてきた平家を義経自ら迎え撃とうとしたから。

※【写真2】(源平合戦図屏風)提示 「P.4参照」

※「扇の的」では、勝つためには手段は択ばない非情な大将の姿が謙著だが、「弓流し」では源氏全体のために自らも戦いに赴く義経の新たな人物像をつかませた。

⑤まとめ・学習の振り返りを行う。

【生徒の「肯定○・否定×」の考え】

○源氏の恥にならないように拾いに行っているところがかっこいいと思ったし、拾いに行かずにバカにされたら義経の自信がなくなって、チームワークが崩れて、戦いに支障が出てしまうかもしれないから。拾いに行って殺されてしまうかもしれないけど、自分のせいで源氏の士気が下がるのが申し訳ない。命を懸けても士気が下がるのを防ぎたかった。源氏のリーダーだから源氏を背負っている。だから、自分が落としたものは自分で拾う。

×自分自身のプライドも大事だと思うし、弓をバカにされたら悔しいと思うけど、弓を拾うことに必死になって殺されたら元も子もない。自分のプライドのためにわざわざ危険を冒してまで取りに行く必要はないし、もし笑われたとしても今後の戦いで大将としての強さを見せた方が源氏も自然と士気が上がり、平家を見返せるのでわざわざ取りに行く必要はないと思う。

どちらも義経の大将としてとるべき手段を情報として自分の考えを形成し、交流することができた。

④人物の生き方に着目し、現代との比較の中で自分の考えを形成する力を向上させる手立て

【単元の言語活動】と【言語活動成立の要件】は以下の通りである。　「資料１:単元構想図」参照

【単元の言語活動】 合戦における武士の生き様や価値観を現代の自分たちの生活と比べ、理想のリーダー像について考えたことをまとめる。
【言語活動成立の要件】 ・「平家物語」に描かれている源平合戦の背景を理解し、当時の武士の生き様から心情を想像している。 ・武士の生き様や価値観【義経のリーダー像】を示す根拠となる表現を捉え、現代の自分の生活と比較して考えている。

「扇の的」の中心人物は「与一」であるが、**各時間で常に「義経」の人物像に目を向けさせた。**戦という状況下で大将としての行動の是非について考えるようにさせた。それは、前期の本校の学級委員、班長、専門委員などリーダーに目を向けると、必ずしもリーダーとして動いているとは思えなかったからである。そこで、時代は違うが、**「義経の源氏の総大将としての生き様」**を現代社会、とりわけ学校生活で生かすことができないか、**理想のリーダー像は何かという点を単元の終末に明らかにする学習**を仕組んだ。

課題:「扇の的・弓流し」の学習を通してつかんだ源氏の総大将である義経のリーダー像を現代と比較して自分の考える理想のリーダー像をまとめよう。

とし、次の点を書く視点に自分の考えを形成させた。

300 字程度でつかんだ義経像が現代の学校生活で通用するか。現代ではどういうリーダーが求められるのか。自分は係としてどのようなリーダー性を発揮しているのか。

生徒の考えを紹介する。

私の理想のリーダー像は、ただ命令するだけでなく自分も動き、周りをよく見て、声かけができ全員を引っ張っていける人です。理由はクラスには三十人以上の生徒がいるので、それをまとめ、指示ができる必要があると思ったからです。源氏の総大将である義経のリーダー像と現代と比較すると戦いのときにただ見ているだけでなく、自分も前線に出て戦っていて、目標のために一生懸命なところがいいなと思いました。また、扇の的を射る者を決めるときに義経はプライドが高く、失敗したら源氏の恥になるのに部下の言葉からよく知らない与一に決めていて、部下のことを信用していていいなと思ったし、現代でも大切だと思いました。義経の行動には賛否両論あるけど、現代でも参考にすべき点があると思いました。

「考えを形成する力」を向上させるためには、考えをまとめる活動を位置付ける必要がある。しかし、ただ感覚的な思いつきを書くのではなく、**様々な情報を基に根拠を明確にする必要がある。**教科書だけでは情報が少ないので、補助資料を複数提示し、思考させることで文章に深みが出ていると感じる。

6. 研究のまとめ

生徒の単元全体の振り返りから見ていきたい。

義経のように話が進むと本当のリーダー像が見えてくるところが平家物語では面白かったです。現代とは命の大切さや動きが違うと思うけど、義経のように学級で自分の力を発揮して強い存在でいたいと思いました。平家物語では人物の行動の裏の気持ちなどを読み取って、内容を理解できてよかったです。古文はまだ苦手意識はあるけど、どんどん面白いという気持ちに変わってきたので克服できるように頑張りたいです。

古文に苦手意識が多いという実態を打破するために古文は現代と通じる点があるとし、古文を古文として読むのではなく、現代との橋渡しであることを常に話した。この生徒は学級委員であるが、義経の人物像をつかむ学習を通して、自分の学級委員という働きぶりを見つめることができた。また、教科書だけでなく、必要に応じて補助資料を提示したことで読み取りの質も深まり、活用する情報も増え、自分の考えに役立てることができた。　【単元全体の振り返り】

「枕草子」学習前の古文への苦手意識	74．2
「枕草子」学習後の古文への苦手意識	64．5
「平家物語」学習後の古文への苦手意識	29．6

古文に親しむ態度が芽生え、作品の面白さに触れ、自分の考えをもつことで苦手意識が減ったと考える。

7. 成果と課題

○現代とのつながりを考えさせたことで古文は単なる昔のものではないことに気付かせられた。

○補助資料を提示し、それを情報として自分の考えを形成し、交流を通して多様な読みに触れた。

○ワークシート集にしたことで予習復習に活用でき、学習の定着を把握し、評価に適切に活用できた。

●「弓流し」での新たな義経像をつかむ学習でこの場面に限定する指示があいまいだったため、先頭に立って戦う義経の姿を捉えさせ切れなかった。

◇参考文献

・『中学校学習指導要領解説　国語編』　文部科学省
・読解力を鍛える古典の「読み」の授業　　阿部昇